

2007年夏、トレンド予報

ファッションの世界では早くも夏が到来!!

今回のENGINEファッション特集は、恒例のファッション座談会をボリュームアップ。

さらに、ヴァカンス・スタイルをフィーチャーしたモード篇、

ファッションの潮流として再び元気を盛り返している

オーダー・メイドに着目したスタイル篇から構成する。

今シーズンのファッション・トレンドは何なのか?

そのキーワードを読み解く。

プロローグ:座談会篇

クールはどこへ行くのか

ENGINEファッション特集は河毛俊作、栗野宏文、中野香織の3氏に本誌・鈴木正文編集長を加えた座談会から始まる。「フューチャリズムこそ今シーズン」と主張する栗野氏と「コンタミネーション」が気になるという中野氏。「そんなことではブランドがダメになる」と全面的に否定する河毛氏。何がクールなのか、そしてクールはどこに行ったのか。そんな時代に改めてメンズ・ファッションのあり方を問う。



河毛俊作

演出家、フジテレビ・ゼネラルディレクター

社会問題になっている「いじめ」をテーマに4月12日(木)22時から始まる連続ドラマ「わたしたちの教科書」の制作が進行中。きれいな黄色が今シーズンらしいセーターはじめ、シャツ以外は全身ブラダのもの。ちなみに、シャツは、ディオール・オム。

栗野宏文

ユニバードアローズ・チーフクリエイティブオフィサー

今シーズンのテーマが「軽さ」、秋のテーマが「ランジブル」ということで、きれいなブルーのジャケットのボタンを自ら白蝶貝のものに付け替えて登場。これまで、スニーカーでの登場が多かったが、この日は今一番気に入っているオールデンで登場。

中野香織

服飾史家

「モードの方程式」「着るものがない」(ともに小社刊)をはじめ、数多くの著作を持つ。歴史的な側面だけではなく、現代のファッションにおける現象についても鋭く観察、発言。日本経済新聞、朝日新聞などに連載中。

鈴木正文

ENGINE編集長

当時はブルックス・ブラザーズのレディースのジャケットにジャガー・エンスージアスティック・クラブなるエンブレムを安全ピンで留めての登場。河毛氏曰く「トラッドな装いなのに安全ピンというのがパンクな印象」と。

語る人=河毛俊作+栗野宏文+中野香織+鈴木正文(本誌) 写真=山下亮一

トム・ブラウンの台頭

河毛 いきなりですが、栗野さん、春夏ファッショニのキモは何ですか。

栗野 そうですね。最大のキーワードは軽さです。そして、過去を向いたものではなく未来。「ブーケー」の表れ方として、スポーティな気分をどれだけカタチに落とし込むかというのが、キモになります。素材でいうとナイロンやポリエステル。スポーツ・ウェアから発想した服や素材をシティ・ウェアに使っているもの。

色でいうと黄色とか水色のようなヴィヴィッドな色が注目です。

中野 軽さやスポーツ・ミックスを通じるかもしれません、ジュンヤウタナベ（コム・デ・ギャルソン）が評価されていました。スポーツ素材でスースを作ったり、ジャージーでバイクーズのを作ったり。それを評してイギリスのメディアは「コンタミネーション」と。

鈴木 汚染とか、不純の意味ですね。

中野 ええ、負のイメージが強いコンタミネーションを、ポジティブな評価の葉として使いはじめています。

河毛 僕には、安いといしが思えない。こういうことはデザイナーズ・ブランドの死滅につながる危険すらある。というのは、「ゼロ高級感」でしょ。仕立てもへチマもないわけだから。ベルクロでペタペタ貼つたりでは、そこに何のワザもないし、ジャージーと何かをあわせるという発想じたいが新しいとは思わない。

鈴木 怒りますね。

河毛 モードから降りたいのか、としか思えない。ただ、もう一つあって、トム・ブラウンの流れはキテるよね。「ブーケー」とかスポーツ・ミックスとか、ヒップ・ホッ

普とかがメイン・ストリームだとしたら、流れとしては地味だけど、いまはクールが逆転していますね。昔は、オーセンティックなモードが歴然とあって、それに反発する意味で、クールの側が安っぽい素材をわざと見せつけたり、本来スースを着てネクタイをきちんとしていくべきところにスポーツ・ウェアで平然と登場したり、侮蔑的な視線を浴びたりすることがクールだった。けれど、いまやそれがメイン・ストリーム。逆にトム・ブラウンみたいに、昔は王道だったものが、クールになつていて。

栗野 この10年くらいはブルックス・ブラザーズ的なものがお洒落だとは誰も思つてなかつたんですね。でも、トム・ブラウンがブルックス・ブラザーズ・スタイルを究極化して、最新ファッショニをして出したところに、みんなググッと来ました。全世界的にトラッド・ファッショングが新鮮だと言われていますね。

鈴木 アイビーきてますね。本来はストトのかかつてない画的な量産服だったものを念入りに作る。本来安く作べるものを作りたがる。それがトム・ブラウン。もう一つが、ビニール傘みたいなものにベルクロを貼りつけて、すべての手間を省略し、ミニマル化を推し進めながらも、高価な服にして、シャーネル的な生き方をしているプラダ。いまはこの2つの流れがあるようにおもいます。

河毛 現代の一番の問題点は、新しいものが新しくいられる時間が短かすぎて、新しいものであるということが分かられない。うちに、次のものに変わっちゃう」と。昔は、営々と築かれた古いものと呼ばれるものがあつて、何が古いかという

コム・デ・ギャルソン・ジュンヤ・ウタナベ マンの2007年春夏コレクション。形はスーツでありながら、既成のスーツの概念にとらわれない、危うい混じり具合がコンタミネーションという評価を受けた。

るカウンターで新しいものが出てきて、しかもその新しさをどうものを認識する、聞く、というものがって、「これは新しいんだ」と理解されて新しいということになった。エレクトロニクス商品なんか、2、3年前の広告を見たりすると突然とするほど古く見える。「こんなものホントに使っていたんだろうか? というくらいに古つたり、機能が落ちていたりする。そんなふうに古びてしまふいつの「新しい」ことには、逆に価値がない気がするんです。



オーセンティックなはずなのに、いま一番クールかもしれない存在、トム・ブラウン。右は本人。グレーと白がコーディネイトの基本。となりのコレクション写真と同様、パンツの丈はかなり短い。

がない。アーム・ホールが大きくて、といふ。

鈴木 寛容じゃない。

栗野 アルマーニ以降はリラックス感とか着やすいとか寛容な方がメジャーなメイン・ストリーム。エディ・スリマン以降は非寛容になつて、最近はもっと非寛容になつていて。

河毛 ジョルジオ・アルマーニがアンソングで男の服を再構築し、サヴィル・ロウの呪縛から男性服を解放したときには、背景には一種のフュミニズム的流れがあつた。

中野 トムのスーツを着る男の隣にくる女性というのが想像しにくいですね。男がひとりで充足しているというか。トム・ブラウンのアイコンになるのはどんな人なんでしょう?

河毛 痢せた人じゃないですか?

中野 足首がセクシーじゃないといけないですよね。あの足首は女性の谷間に匹敵するって言つてました。

河毛 昔、脚線美が男性のものだったという時代に少しづつもどつてゐるんですね。半ズボンになつて……。

中野 半ズボン脚線美の時代つて、中世からフランス革命まで数百年続いていたことを考へると、長ズボンの「流行」が終わりに向かう、と見る」こともできるかも。

鈴木 春夏は出でていますね。

河毛 ブラダなんかそうでしたね。

栗野 パンツ丈はメチャクチャ短い。

鈴木 もう、「街のアイビーリーガーズ」ですね。

河毛 初期の「メンズクラブ」によく写つたようなね。

中野 ナロー化の極みですね。アメリカ人の好きなフォアギブネスみたいなもの

栗野 靴が全面的に見える」とが当た



近年のモード界で他のクリエイターに大きな影響を与えてきたエディ・スリマンがクリエイティブ・ディレクターを務めるディオール・オム。ひと目でエディの服だとわかるてしまうのも善し悪し。



男性の脚線美、復活

鈴木 僕はこの10年で一番大きな事件はディオール・オムのクリエイティブ・ディレクター、エディ・スリマンの登場だと思ふんです。メンズ・ハイ・アッシュジョンの第一線のクリエイターたちに与えた影響は計り知れない。トム・ブラウンとエディ・スリマンをどういう風に関係付けるのか、それが問題です。

河毛 共通するのは、サイズが小さい。アメリカ人に着れるんだろうか……、と要らぬ心配をしたくなる。

中野 ナロー化の極みですね。アメリカ人の好きなフォアギブネスみたいなもの

男の下半身をどういじるのか？

り前になつちやつたから、靴の「ザイン」も変えなきやいけないんですね。忙しくなりました！

鈴木 悩ましいところですよね、どういう靴を履くのかは。その一方で、レギングとか、レガースの類いやスパッツ用の靴下なんというものの、出てきていますよね。

河毛 男の下半身をどういじるかといふことだよね。今まで触れられてこなかつたから。ユナイテッドアローズなんかたまに覗くと、半パンのスースとか薦められるんだけど、それに乗るほど馬鹿ではないと。

栗野 いや、半年後には河毛さんもきっと着てますよ。

中野 お似合いになりそうです。

河毛 ホントにリゾートとかだと、アイビーの時代からあつたじゃないですか？ マドラス・チエックのショーツにシアサンカーニのジャケットとか。だけど街中だと、僕からみると省エネルックに近いものがある。

鈴木 でも、昔は着てたでしょ。バニュード・ショーツにネイビー・ブレザーとかジャケットとか。

河毛 あれはまだ知識のない時代で、何をどう着ていいかわらなかつたから。アメリカ人のいうことは全部正しいと思つた。しかも、アメリカ人はそんなこと言つてなかつたんだよね。「VANデヤケット」って会社が言つてただけだから。

鈴木 ホントのアメリカ人を見たら、なんだオレのほうがカッコいいじゃないかって思いました。

河毛 思いましたよ。アイビーじゃないぜつて。アメリカ人って全員アイビー着ていると思っていた。大体、ケネディの服を

今見ると全然アイビーじゃないしね。2つボタンで、むしろ「ノンテンポラリーに近い。

栗野 シャツもレギュラー・カラーカワイドで、ボタンダウンは着てないですもんね。

河毛 むしろ、今のラルフ・ローレンのブラック・レーベルみたいなスースですよね。

ジョージ・ダニエルズ氏と

栗野 ジョルジオ・アルマーニもエディ・スリマンもトム・ブラウンも3人ともセクシーリティ的にいうと、同じ系統の人たちだけ……。ジョルジオ・アルマーニ氏の場合はふんどし系というか肉体を鍛えていて、後姿がカッコいい男みたいな。

鈴木 ナポリの漁師っていう感じね。

栗野 エディの場合は堂々とエミニーニをだしたことが新しかった。トム・ブラウンはまったくコンサバティブな男の格好なのに、それをあのセクシーシャリティの「一番新鮮なものとしてプレゼンテーションした」という驚き。3人とも違いますよね。

中野 ゲイの多様性が花開いてる感じですね。

河毛 だから、トム・ブラウンの場合はカチツとしているじゃないですか、服そのものは。でも、ベントの裏にレース張つたりしている。表面上は非常にストイック。色数も少ない。」本人は、ほとんどグレイと白しか着ていないもんね？

栗野 やっぱり新しいですよね。

鈴木 「の間僕は、ブレゲ以降もつとも画期的かもしれないムーブメントの原理を考えた、ジョージ・ダニエルズという人に会つたんです。マン島の屋敷に一人



ビニール素材やベルクロを用いるなど、徹底的にフューチャー感覚を出しているブランド。その一方で、ベーシックでコンフォタブルな天然素材を用いたアイテムも充実しているのが懐の深さ。



サヴィル・ロウの呪縛から男性を解放した瞬間？ ジョルジオ・アルマーニ87年春夏コレクションから。男性のスースが女性的、女性のスースが逆に男性的、とイメージが接近しているのがわかる。

で住んでいて、1920年代のベントレーとかアルファロメオとか持つていて、背中は背筋もシャキッとしているし運転も上手なんです。その人がどちらも左足の靴を履いているんですよ。

栗野 知らずに履いているんですね。なんだ」とか言つてました。

河毛 それは照れ隠しなの。

鈴木 イギリス人って、やるじゃないですか。靴下をわざと間違えたり。気にしないで、そういうことを装つためにわざと変えるでしょ。

中野 余裕を示すための無頼着、ノンシャランのボーディショナリズムでしょうか。

鈴木 「あっ、そうだったか」といつただけ。右の靴が紐靴で、左がスリッポンなんですよ。

河毛 それはわざとだよね。

鈴木 ジャケットの下にカーディガンを着ているんですが、そのボタンも掛け違えているんです。

中野 貴族的なイヤミが絶妙の隠し味になつてるんですね。

新・貴族、エアドウズ

鈴木 さつきからの話つて「デザインではなく、スタイリングの話ですね。今、デザイナーがスタイリスト化し、スタイルリストがデザイナーの領域に足を踏み入れてきている。つまり、スタイリストの資質を持つ人がクリエイティブ・ディレクターの名の下にデザイナー化してきた。

栗野 服が服そのものでプレゼンテーションする時代ではなくなり、トータルのプレゼンテーションで勝負する時代

になつたから、広告戦略とか、どういうモデルに着せるとか、そういうこともひつくるめて、全部に目線が行きわたる人が必要になつて、クリエイティブ・ディレクターというものができた。だから、服装だけ詳しい必要はない。

中野 今モードルが2世ブームじゃないですか、バーバリーがモードルとして使ってているのがブライアン・フェリーの息子とりチャード・ブランソンの息子でしょ。あの人たちが「エアドウズ」と総称されていますね。継承者「hei」「models」をくつづけて「エアドウズ」、「hei」「models」と綴ります。

河毛 要するに「ブランド」というものは新しい貴族階級を作らないとどうにもならない。特別な人たちを作つていかなといと「ブランド・アイデンティティが保てない」んです。

中野 本物の貴族はボタンを掛け違えているから、使い物にならない。だから、ブライアン・フェリーの息子だつたり、キース・リチャーズの娘だつたりを「ブランド・アイコン」に仕立て上げているんですよ。

鈴木 キース・リチャーズの娘とモンテカルロで昼と夜、食事をともにしたことがあるんですけど、話が面白いです。僕もそのとき同じことを思つたんです。現代の貴族だつて。彼女はキース・リチャーズの娘である、それ 자체でサムシンング。

河毛 キース・リチャーズの娘という職業なわけですよ。

鈴木 変なオヤジだから、真つ当なことはほほなかつたと思うんです。エキセントリックなことが日常。

中野 そういえばエキセントリシティーって英國貴族の伝統的な資質でもありますでした。

河毛 あれを固定化した階層として社会が認めるようになるかならないかだね。イギリストは「ロック・ミュー・ジンシャン」にサーの称号をあげたりするから固定化やすいんです。

栗野 アメリカはセレブリティというくくりしかないけど、イギリストにはもう少しそこにカルチュアの香りがありますよね。

アメリカ人が一番ありがたがっているんじゃないですか、そういうロック2世。ロッド・スチュワートやロン・ウッドの娘なんかもやってますよね、さつき河毛さんが仰った「一世業」。

鈴木 雰囲気が実際あるんですよね。ちよと普通の子と違う何がが、見るからにある。同じ服を着ても着方が変ですかね。さつきの貴族に通じますね。

プラダとラルフ・ローレン

河毛 ラルフ・ローレンの中にちょっと変わったモノ入つてたかもしれないしさ。

栗野 普通に暮らす」とが逆にハイなのかもしれないですよね。

ロード・スチュワートの娘、キンバリー・スチュワートも行動が常に注目される存在。写真は2006年10月にL.Aで開かれたメレセデス・ベンツ・ファッション・ウィークにモデルとして登場したときのもの。



ロード・スチュワートの娘、キンバリー・スチュワートも行動が常に注目される存在。写真は2006年10月にL.Aで開かれたメレセデス・ベンツ・ファッション・ウィークにモデルとして登場したときのもの。



バージングループの創設者、リチャード・ブランソンとその息子、サム。以前行われたある調査ではイギリスのティーンで一番リッチだったという結果も、現在はバーバリーの広告などでモデルに。

栗野 制服ですよね。

河毛 中国共産党みたいな感じ。あくまで、店員さんは個性を出さない。

鈴木 店員さんがお手本にならない、109みたいに。

河毛 「彼女、私みたいに着てみると、いと思うよ」みたいなことは一切言わない黒子ですね。

中野 毎回、プラダがいろんな角度からほめられますね。この座談会では(笑)。

バック・トゥ・ベーシック

鈴木 栗野さん、「これからファッショの動向はいかがですか。

栗野 キーワードはタノジブルです。

鈴木 触って分かるという意味。

栗野 去年の秋冬あたりまではスーパーフィシャルな感じ、つまり表面で動いてるというか、上滑りしているというか。

鈴木 分かる。タノジブルな気分の中で、ラルフ・ローレンの再評価があり、トム・ブラウンが出てきて、ツイードがまた注目され……。スポーツというキーワードも、デザインだけではなく、機能や軽いとい

河毛 今日はブルーのパンツに黄色いセーターにしました。テーマは何となくデイー・マーチン、というか50~60年代のハリウッドスターが仲間とカードで遊びときのスタイルといったイメージ。今、

男の人はカジュアル・ウエアがリラックスしそうだと思う。襟の付いたシャツとウールのパンツとカシミア・シルクのセータードラッグなきやいけないと思う。ジヤージーでどこへでもかけてしまうのは大人の男性とは言えない。基本はクラシック。最近は流行から遅れたいと思う(笑)。男が服を着るという行為は儀式的で、ときに滑稽ですらあるとい

トライディショナルなものにもう少し軽いエッセンスを入れていきたい。あと、ずっとSマークを履いていたんですが、今日はオールデンを履いている。オールデンの黒の革靴みたいなのは、トム・ブランソン現象どこかで繋がっていると思います。アメリカの武骨な黒い紐靴、というのが新鮮。自分流のアイビーみたいな格好が一番したいですね。それが僕にとってのタノジブル。

中野 男の人は着たいと思うものを何でもどんどんお召しなればよいと思っています。その結果を観察するのが私の仕事なので。キーワードとしては、「コンタミネーション」という言葉がやはり気になります。インフォメーション・ポリューションというべきか、過剰な情報に汚染されるなかで、ピュアであるというのが、場違いない気がする。「コンタミネーションがプラスの価値に転じて、なにかそこから新しいものが出てくるのかな」と期待しています。当面は男性の足首の行方に注目しますが。

栗野 軽さを自分の中に取り込んで、

河毛 ディオール・オムの店に行くとデオール・オムのヘヴィ・ユーザーのお客さんと店員さんの見分けが付かない。プラダは逆で、店員さんをまったく目立たなくしていい。

本来は、常にオーソドキシーというものがあつて「お前、その格好では教室に入ることを認めない」という人がいないとクールというものが成立しない。



©ORION PRESS/ananimages